母袋俊也 Toshiya Motai

再出発後の新たな関心

文●石川健次
Kenji Ishikawa 毎日新聞学芸部記者

垂直性と水平性、あるいは余白への積極的な関与などを通じて、絵画における普遍的な真理の追究を試みる母袋俊也の作品を眺め、筆者は時折、畏敬するピート・モンドリアンを思い浮かべることがある。抽象絵画を切り開いた20世紀の巨人の名を冒頭から持ち出し、いささか大上段にすぎたかもしれない。なにもここで、モンドリアンと母袋の対比を話題にしようというのでは毛頭ない。

モンドリアンが矩形（たまに菱形に見るように強要する場合もあったが…）の画面にいっさいの主観性を排し、純粋で普遍な調和を目指したとするなら、愛する藤野の風景を題材とし続けることを広言してはばからず、また矩形の画面ではあってもそれを複数パネルに解体(集積？)し、再構成するなど支持体の変奏を試みる母袋は、むしろまったく異質な存在と言ったほうが適切だろう。にもかかわらず、冒頭でも紹介したように絵画における普遍的な真理を真摯に追究する姿勢や、色彩を抑え、単純かつ簡潔な表情に行き着き、それに徹したモンドリアンの作品が持つ厳格さを母袋の作品もまた感じさせることなど、通底する要素は少なくない。

閉塞しがちな今日の視覚表現、なかでも絵画への信頼回復を母袋に期待する気持ちが、筆者に冒頭のような体験、つまり幾多の試行錯誤を経て文字通り従来にない純粋抽象絵画へとたどり着いたモンドリアンを思い起こさせているのかもしれない。

今春、母袋は同時期に2か所の会場で個展を開いた。昨年秋にそれまでの中間報告とも言える充実した個展を開き、半年もたたないうちに新作展、それも2か所での開催に相変わらずの旺盛な創作意欲を感じる。昨秋の個展については前々号(第6号)で触れたので、今回はそれに続く、言い換えれば中間報告後の再出発を期した作家の新たな作家像、作品像についての紹介ということになるだろうか。

ただ2か所のうち、余白を多用し、複数パネルによる絵巻物的な横長の画面に理知的な風景を展開させたエキジビション・スペース(国際フォーラム)での発表は、中間報告をさらに押し進めた、言い換えれば従来の試みのさらなる総決算と呼ぶことが可能だろう。すなわち自然の安易な再現でなく、また図(塗られている部分)と地(塗られていないように見える部分—余白)が一見ほぼ交互に描かれているかのように見えるその大作は、すでに前々号で触れたように、これまでの母袋の歩みをまさに総合した佳作だったように思う。

再出発後の作家像、作品像を考えるうえで注目すべきは、ギャラリーなつかでの発表である。余白(何度もこの言葉を使っているが、母袋の場合、文字通りの余白ではなく、図とほとんど等価の余白であることを付記しておきたい＝前々号参照)は影をひそめ、画面のほぼ全体にまで絵の具が行き届いた、オール・オーバー・ペインティングに似た風情を強調し始めた作品群が、そこには並んだ。

昨秋並んだ新作の中にもすでに顔をのぞかせたこの傾向は、同展にいたってはっきりと作家の関心を占め始めたと言っていい。図と地の連続、つまり図、地(余白)、図、地(余白)……と横方向へ続く以前の絵画では、見る側の視線は文字通りその流れにつられて横へ、あるいはシステマティックな支持体の構造へと誘われた。

だが余白が消え、図、地、図、地……と続くシステマティックな印象が消えたとたん、視線は横へも、支持体の構造へも引き寄せられずに、どこから眺めたらいいのか確かな指標さえ容易には見つからないオール・オーバーな画面そのものへと突き当たる。作家の言葉を借りれば、支持体の構造など「外側の形」から、まさに絵筆によって描かれた画面そのもの、すなわち「内側に発生する形」へと視線は吸い寄せられる。

母袋の作品が仮に、ともすれば単調、また禁欲的な印象を伴ったとすれば、それはまさに図、地、図、地……と続く単調さ、また余白というほとんど何も描かれない部分が誘う禁欲さであったと言えるかもしれない。だがそれは、「外側の形」へ関心が注がれた結果として当然の、母袋としては覚悟のうえでの単調さ、禁欲であったに違いない。

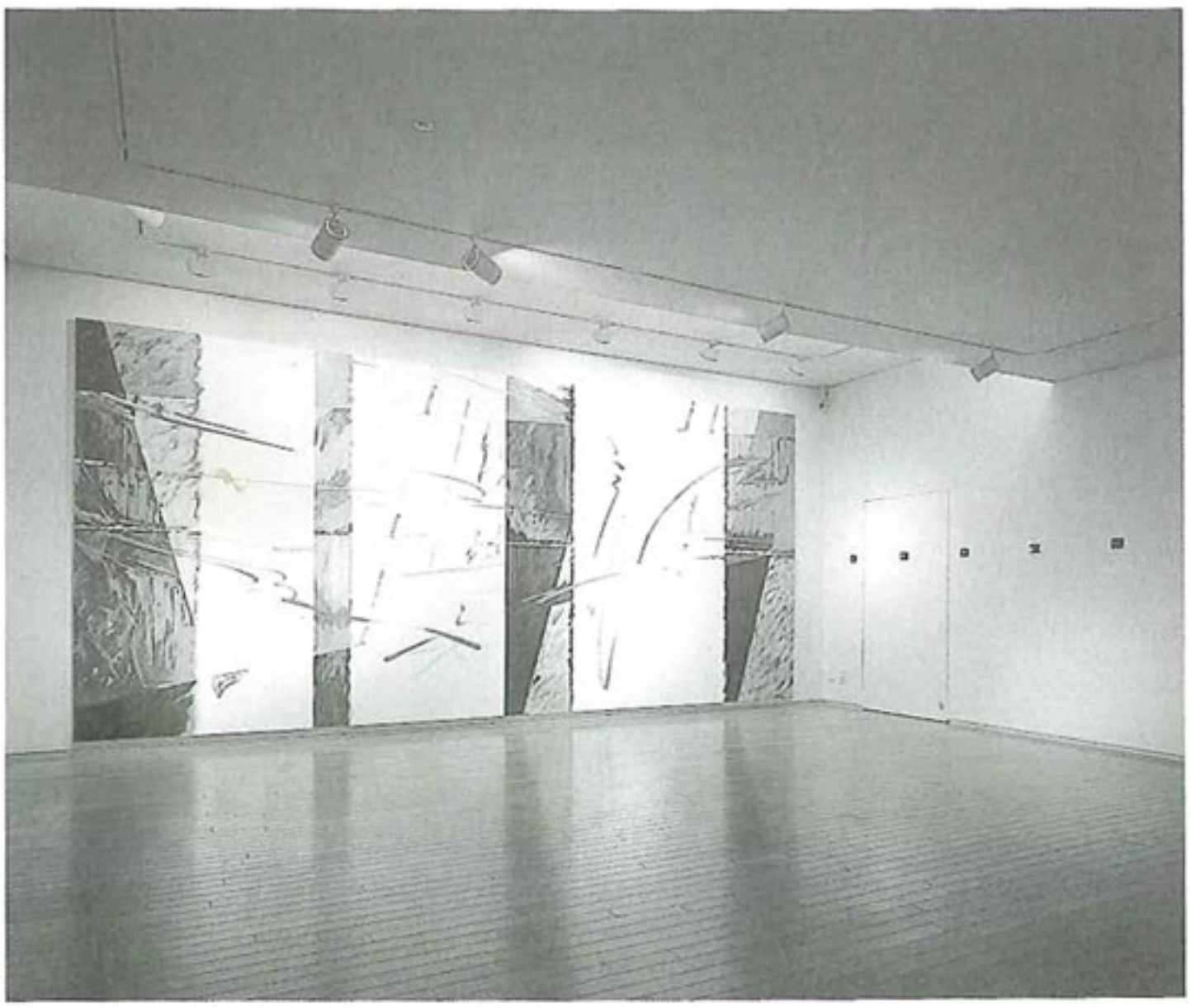
ギャラリーなつかに並べた新作で、「内側に発生する形」への関心を深めた母袋は、そうした単調さ、禁欲から自らの作品を解放しようともくろんだ、と考えるのはあながち的はずれではないと思う。画面に加わる新たな、まして全面を覆うほどの饒舌な色彩が、その作品空間にいっそうの起伏をもたらすのは言うまでもないからだ。

事実、透明感や光さえ内包しているかのような絵の具の輝き、艶など物質的な魅力一つをとっても、作家の卓越した技量はうかがえる。見る側の視線を吸い寄せ、魅了する役目を、「内側に発生する形」は十二分に果たしたのだ。

だが試みは始まったばかりでもある。さらに言えば、「外側の形」への関心ですら消え去ったわけではあるまい。エキジビション・スペースでの発表を総決算と書いたが、あくまで現時点での総決算と呼ぶのが正確だろう。それどころか、あえて再出発を期した今春の個展に発表したという事実は、むしろ「外側の形」への関心もより一層深めてゆくのだという意思の現れなのかもしれない。

もしそうだとすれば、筆者のこの拙稿もさっそく訂正が必要だ。つまり再出発後の作家像、作品像を考えるうえで注目すべきは、やはりエキジビション・スペース、ギャラリーなつかの両方である。なぜなら前者で余白を用意し、後者では余白を用意しない2通りの方法で、言い換えれば両者をパラレルな関係で追究し、その果てに絵画における普遍的な真理を達成するのが、母袋の今後の関心なのだから。

冒頭に挙げたついでに再びモンドリアンの話に戻ると、モンドリアンに詳しい五十殿利治氏(筑波大助教授)によれば、「モンドリアン的」な画家であるための条件として、方法的な意識の強さ、その所産であるシステマティックな連作、ついでタブローへの徹底した、ぎりぎりのこだわりなのだという。これって、まさに母袋にも当てはまると思うのだが……。



「installation view,M298, TA・MA UNOU Ⅱ」 280×600（4枚組） アクリル、油彩、綿布 2001
エキジビション・スペースでの発表

「M301≪ mag fuj ino≫3」　220×220（2枚組）　アクリル、油彩、綿布　2001　撮影：町田康範

■ 母袋俊也　TA-MA UNOU HI―実景と絵画―
3月23日～4月22日
エキジビション・スペース
千代田区丸の内3－5－1東京国際フォーラムBブロック1階フォーラムアートショップ内
☎ 03－3286－6716

■ 母袋俊也展　≪ mag fuj ino≫
4月2日～21日
中央区銀座5－8－17GINZA PLAZA58ビル8階
☎ 03－3571－0130

■ もたい　としや
1954年 長野県生まれ
1978年 東京造形大学美術学科絵画専攻卒業
1983年 旧西ドイツ国立フランクフルト美術大学／シュテーデルシューレ絵画・美術理論科Rヨヒムス教授に学ぶ（87年帰国）
1984年 水彩「神話の墓」シリーズ開始
1985年 複数パネル絵画様式の展開
1988年 戸外でのスケッチの再開
1995年 アトリエを立川から藤野に移す
1996年 奇数パネルでの制作
1999年 野外作品「絵画のための見晴らし小屋」制作
2000年 東京造形大学教授就任
個展・グループ展多数

「M300≪ mag fuj ino≫2」　62.5×724（4枚組）、中「M299≪ mag fuj ino≫1」　110×500（4枚組）、右「M301≪ mag fuj ino≫3」　220×220（2枚組）
すべてアクリル、油彩、綿布　2001　撮影：町田康範　ギャラリーなつかでの発表